5、御利用は計画的に

「ふぅ……のぼせちゃったわ……」

バスタオルを体に巻きながらひろ子は居間へとやってくる。髪は水滴が見られるものの洗ってはおらず、汗の匂いがつんとする。

洗えば良いのにと慎吾は言うもくすくす笑われた。

「あ、あの、麦茶……」

「ありがと、武山さん……んごく……はぁ……おいし……」

出されたコップを遠慮なく呷るとほっと一息。何かに気付いて口に手を当てると、すぐにティッシュで丸めて恥ずかしそうに笑う。

「初めてよ。あんなことしたの……」

「え？　何がです？」

「んもう……、おちんちん、無理やりぱっくんさせておいて……。いじわるな人」

「あ……」

ティッシュで丸めたのは陰毛だろう。そう思うと、また股間がむくむくっとおさまり悪くなる。

「さてと、そろそろお夕飯の買い物しないと……」

「え、まだ……」

時計を見ると午後を回る頃。そろそろ外も下校する人々でにぎやかになる。そんな時にひろ子がアパートから出るところを見られたら都合も悪い。慎吾は引き止めたい気持ちを飲み込んだ。

「ふぅ……」

ひろ子はバスタオルを取るとブラジャーをつける。先ほどまでと違って恥じらいも見せないが、それでも女性の着替えというシーンに慎吾は目を丸く開いて凝視していた。

「ん……」

下着を見て眉を顰めるひろ子。いろいろしたせいかぬるっとぬめっており、せっかく汗を流した身体で身につけたくないらしい。

「そうだ……。これ、返してもらうわね」

「え……あ、それは……」

ひろ子は例の盗まれた紐のショーツを取る。

「だーめ。これはもともとあたしのよ？　それに、武山さんも、こういうことしちゃだめよ？　いい？　約束ね」

「……えと、それは……」

なおもぐずる慎吾に対し、ひろ子は諭すように続ける。

「今日のことは私も変にしてたし、武山さんだけを責めるつもりはないわ。けど、武山さんは責任取れないでしょ？」

「それは、だから、なんとか……がんばって……」
「無理よ。うん、私も貴方も大人なんだから、ね？　今日のことは私もしっかりしないとって反省してるし、処理もその……するから……。だから今日のことは二人の秘密。お願いよ？　そうじゃないとあたしもたけやまさんも困っちゃうもの……ね？」
ひろ子の言うこともっともであり、背水の覚悟で責任を取るつもりも脅す気も無い。
初めて触れた女性の身体。とめどなく吐きだした欲望だが、今もくすぶるモノがある。けれど、ひろ子の言うとおり、たがいの生活、人生を壊しかねない。
今が厳しく惨めな生活とはいえ、一時の欲望に身を任せるわけにもいかない。
今日の出来事は真昼の夢と思い込むべきだ。慎吾はそう思い、頷いた。
「わかりました。藤崎さんの言うとおりです」
「うん、それじゃあね……。もう、元気出しなさいよ。武山さん、こんなこと言ったら未練になるかもしれないけど……、すごく良かったわ。自信持って。そうすれば彼女ぐらいできるわよ」
「そんなの、無理ですよ……」
「もう、そうやってすぐいじけるのは悪い癖。ふふ……。それじゃあね」
「はい、藤崎さん……、あの、さようなら」
「……」
「？」
玄関に見送りに出るもひろ子は慎吾を見て目を細める。何か言いたげで、からかっているようなそんな顔。
「どうかしました？」
「もう……。ひろ子よ？」
「あ……はい、ひろ子さん、さようなら」
「それじゃね……」
「はい……」
くすっと微笑み去っていくひろ子。さようならと言ったのは自分なりのケジメのつもり。もう二度とこんなことはしないし、できない。だから、だからさようなら……。そのつもりだったのに……。
「何が彼女できるだよ……。ひろ子さんより素敵な人なんてそんなにいるわけないじゃないか……。ハードル上がりまくりだっての……」
忘れるつもりがしこりとなって記憶に焼き付いた気がする。
初めての女を忘れられないのは男の習性というけれど、去り際に微笑まれたら女慣れしていない慎吾に忘れることなどできないだろう。この先、どんな商売女を呼ぶことがあっても瞼の裏の人妻を忘れることはできそうにない……。
「ちくしょう……」
ドンと壁を叩く。先ほどまでの熱い交感は夏の日の見せた幻と消えた。

せめてパンティだけでも残してくれたら良いのに、コトを終えたひろ子はそんな隙も見せなかった。
初めての体験。年上の美人妻。コンドームも無しに思いのたけをぶちまけた……。そんな経験も時間と共に過去へと流されてしまう。
「……あれ、待てよ……」
そんな時間の本流の中、強く打たれたクイのような心配事が一つある。
膣内に射精してしまった……。
それはつまり、場合によってはひろ子が妊娠をしかねないということ。一人娘もそこそこの年齢だけれど、まだ無理という程ではない。
彼女は自分で処理すると言ったがどうやって？　自慢ではないが今日出した精子はいつになく粘っこい。ひろ子の膣を目指して粘り強く泳ぐのではないだろうか？
「やっぱ、まずいよな……。そんなことになったら……」
慎吾は慌ててパソコンを立ち上げ、検索ワードに避妊の文字を打ち込む。今できることがあるならば、それはアフターケアぐらい。
「えと、えと、ぴるぴる……ぴる……」
初めての快感と感動の次は相手への逆恨み。そして自己保身に走る猫背の男。モニターの明かりが眼鏡に反射するなか、その瞳はぎょろりと動く。
「あ、あった……。これだ……、えと、振込先はこれで、あて先は……」
配達区域だから住所は覚えている。ガイダンスに従って他人の個人情報を勝手に打ち込み、値段を確認する。
「に、二万円！？　そんなにするの！？」
値段と預金残高を交互に見て首をひねる。だが背に腹も変えられない。慎吾は相模大野のデリヘル店のサイトを開く。前から気になっていた嬢、ルミコの写真をしばらく眺め、今度は暴露サイトで検索する。
――　ルミコ最悪。全然つまらない。パネマジだわ、あれ　――
――　ルミコは出稼ぎ。おっぱいタッチＮＧ　キスNG　なにをしろと・・・　――
――　ルミコは地雷だろあれ　テコキで一回したらテレビ見てタバコ吸ってたぞ　――
ルミコに関する愚痴や叩きを抽出することしばし、最期に一時間の値段を見る。
60min・・・２３０００円
ピルより高く、評価は低い。
キスもおっぱいタッチもできないタバコ臭い女にテコキしてもらう為に必要なのが２３０００円。キスもおっぱいも触らせてくれて、さらに中出しさせてくれたひろ子は女神としか言いようがない。ルミコのような去年は同い年、今年年下の異次元の時間軸に生きる怪物とは違うのだ。
「そ、それにアフターピルって生理痛にも効くって言うし……、べ、別にいいよね……」
24時間以内の服用で効果は98%。2%の不安はあるが、何もしないよりずっと良い。安

心を金で買う。都合の良い事にこんな田舎ですら明日のお昼に届けてくれる。つまり間に合うのだ。

「よ、よし……」

慎吾は承諾をクリックすると、今度は急いで村唯一のコンビニに代金振り込みに走る。

一瞬もたつくのは腰を振り過ぎたせいだろうか。先の体験は腰にも懐にも重い楔を残したようだった……。

いつもより少し遅い目覚め。
昼の大騒ぎの結果、眠るのも遅かった。だが、心は穏やかだった。
23000円で買った安心は今日の昼までに仕事をこなしてくれる。風の噂では単身赴任だと言っていたし、ひろ子以外が荷物を受け取ることも無い。
なぜ慎吾から荷物が届くのかは不審以外の何物でもないが、贈り物を考えれば他言できないし、用途も理解してくれるはず。
時間が経つにつれて身勝手で押し付けがましい行為だと思うが、それ以外に打てる手も無い。とにかく昨日のセックスの安易な代償だと割り切る。
「……」
営業所は人もまばらで出発する配達員とすれ違う。既に慎吾の配達用の新聞が用意されており、すぐに行けとばかりに伸介が手でしっしとジェスチャー。
エンジンをかけてしばらくならし、地図と申し送り事項を確認。特に問題は無い。
伸介は嫌味な態度だが、いつものように頭に来ない。
慣れたわけではなく、妙な余裕ができた気がする。
「……」
地図を置くとバイクを走らせる。いつもと同じ仕事なのに、何か変わったような気がした……。

いつもと違うルートを通ったのは何かを期待してのこと。
自分はこんなに意識しているのだから、きっと彼女も何かアクションがあるかもしれない。
そんな安易な気持ちを抱きながら例の家を訪れる。
しかし、いつもと違い、室外機が音を立ており、雨戸もしっかり閉められている。
当然、物干し竿には何も無い。
それが答え。
さようならと言ったのは慎吾の方からなのに、改めてそれを見ると気落ちする。
期待しただけに落差も大きく、がっくりと肩を落とした。
だが、それでよかったのだ。
ピルは今日の昼にも届く。
そうしたらこれで終わり。
生理痛を和らげてもらえたらセックスのお礼にもなるだろう。
責任の取れないセックスなのだし、これで良かったのだ……。
慎吾は自分にそう言い聞かせ、新聞を縦に長く丸めてねじ込むと去って行った。

その日はいつもより風の強い日だった。そういう時は風で飛ばされないようにビニールに入れる作業があるので出発が遅れる。

深夜と言える時間、いつものように人気のないバイクを走らせる。

新しい道路は街灯が複数設置されているせいで夜中でも煌々と明るい。

暗かった頃は工事現場にダイブした愚かな不良が居たらしく、そのこともあって街灯がこれでもかと設置されたとか。

普段なら制限速度を守っているが、最近はアクセルを回すことにためらいがない。何かたがが外れたような気分だった。このまま不良の後追いをするのはごめんだと、未だにタバコの空箱が備えられている場所では減速する。そしてまた加速。たまに片手を上げて風の感触を楽しむが、５０CC のバイクではあの感触は味わえないらしい。

配達時の制限速度を新鮮に感じたのは最初の数日だけで、あとはただの慣れ。何か変わった気がするが、それも気のせい。

あれから一週間したけれど、気持ちも薄れ始め、あれは白昼夢だったのかと思えてくる。

最期の一軒は例の家。

今日もしっかり戸締りがされており、室外機が小さく音を立てている。

昼間の情事で燃え上がったつもりが、家庭に戻れば人妻に戻る。新聞配達の男など相手にするはずもなく、勢いで放火されての火遊びでしかない。残るのは消し炭だけ。むしろ自分に相応しいと思い、新聞をポストに入れる。

「？」

いつもと違い、ポストが固い。何かが入っている。よく見ると段ボールが詰まっていた。誰かの悪戯だろうと思い、捨てようとしたが、入口が閉ざされていて取り出せない。

「ったく……」

風は強いが晴れているのだし、入れ込む必要も無い。この前と同じように庭に回って石で重しでもしておけばよい。そう判断した。

新聞を室外機の上に置き、帰ろうとすると何かが顔に触れた。

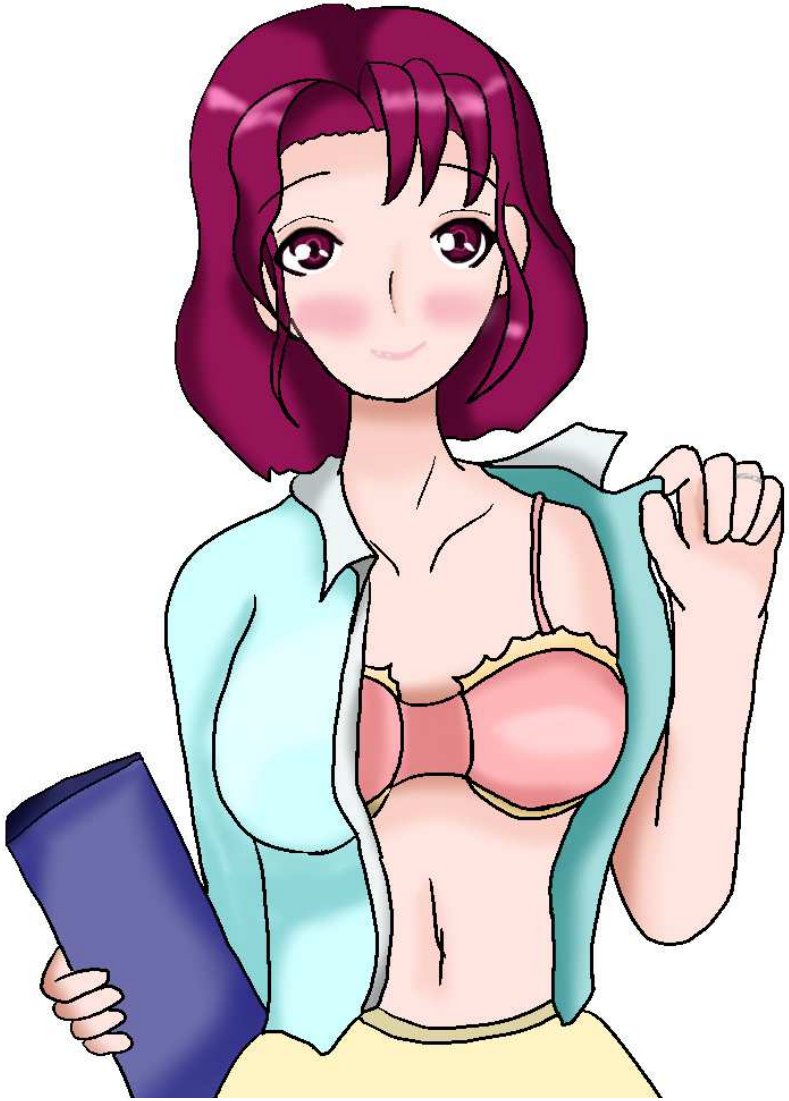
「……」

それは彼女に持って帰られた赤い紐状のショーツ。瞬間、身体が熱くなり、洗濯バサミを破壊する勢いで奪うと急いでバイクに戻った。

これでオナニーをしろという嘲笑だろうか？　それでも良い。ひろ子を思い出してオナニーできるのであれば、それでいい。

慎吾は急ぐあまりニュートラルでアクセルをふかし、音に慌ててギアを入れて今度は前

後にどったんばったん……。
虫の声を騒音で押さえつけると、どっどっどと帰路に着いた……。
「はぁはぁ……ひろ子さん、ひろ子さん……ああ、くそぉ……ひろ子さんのおっぱいもみたいよぉ……舐めたいよぉ……」
家に着くなり下着を置かずにチンポを扱く慎吾。恥も外聞もなく、ただただひろ子を思い出してオナニーに耽る。けれど、なまじっか女を知ってしまったことと、昨日頑張り過ぎたせいでチンポに勢いがない。妄想で補うにはあまりにもひろ子とのセックスが衝撃的だったのも災いし、気持ち良くなれない。
「くそ……なんだよ、これじゃ生殺しだ……」
ひろ子のパンティを掴みながらふぅと一息。我慢汁は出るけれど、射精感はまだ遠い。少し休んで、ゴハンを食べてからもう一度試そうと思い、ひとまず手を洗おうとする。
――ピンポーン……――
チャイムの音がした。
誰だろう？　配達を頼んだ覚えはないが……。
居留守を使うために足音を忍ばせ玄関に寄る。そしてまたチャイム。
「すみませーん、回覧板ですけどぉ……」



「え……？　」
声の相手は……。
慎吾はドアを開け、訪問者を受け入れる。
「あ、あの、ひろ……藤崎さん……えと、今日は……なんで？　」
「はい、回覧板。それとぉ……、お尋ねしたいんですけどぉ、昨日、干していた下着がなくなってね？　それで、武山さんは何か見てないかなって思って……、それでお伺いしたの。少し、お時間いいかしら？　」
「え、ええ、それなら、中で……お話しましょうか……ええ、その方が……　」
「うふ、それじゃお邪魔します……　」
ひろ子は後手で鍵を閉めると、遠慮なく上がった。
今には布団と今まさに使っていた赤い紐状のショーツが置かれており……。
「あら、どうして私のショーツが？　武山さん、理由を聞かせてほしいわ。ね？　」
「はい……それじゃ、その……　」
「それとぉ……。武山さん、こんなにピルを送ってもらっても困るわ？　30 回分なんて……。夫に見られても言い訳に困るし、このまま捨てるのももったいないと思うんだけど……どう？　」
「え？　30 回……？　」
「注文間違えたでしょ？　」
「あ……　」
「それとも……、あと29 回するつもりだったのかしら？　いやらしい人　」
ニコリと笑うひろ子。慎吾は首がそのままもげ落ちてしまうのではないかという勢いで上下させる。
「えっちなんだから……　」
慎吾がカーテンを閉めるとひろ子は両手を広げる。二人は歩み寄るとすぐにでも唇をむさぼり合い……、白昼夢はまだまだ……。